

幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.22
平成13年9月1日

これから横浜能

会長 新堀 豊彦



いよいよ明年（平成十四年）は、「横浜能」が五十回の記念すべきときを迎えます。

ふり返り見ますと、昭和二十八年十一月十一日に第一回横浜能が、初代能楽連盟会長中村桃山先生を中心に行われてから、まさに半世紀の年月を経過したことになります。その間幾多の困難を乗り越え中村初代会長の初志であった、五流家元級の演能が毎年一回、横浜市（教育委員会）から市民局、そして文化振興財団の絶大な御理解と御協力によって質の高い能の公演が行われ、横浜市民にとって長い間唯一の鑑賞のチャンスをつくりあげて参ったのであります。その結果当連盟は、横浜文化

賞、神奈川文化賞を受賞する榮譽に輝き、連盟五十有余年の歴史をりっぱに築き上げて来たものと自負するものであります。

が同時に、我々が中枢となつて二十年近い運動の結果待望の横浜能楽堂が平成八年六月に完成し、山崎有一郎館長を始めとする、優秀なスタッフによる多彩な企画やすぐれた能の公演が定期的に行われるようになりました。したがって、連盟の大目標である横浜市民に対する能の日常的な普及活動が、まさに期待以上に大きく開花し発展することになったといつても過言ではありません。

そこで連盟としては、五十回横浜能を節目とし、新しい横浜能の創造を目指して再出発をはかりたいと考えたのであります。約一年近く、衆知を集めまた能楽堂の皆さんとも論議を交わし、二十一世紀の横浜能楽堂に

ふさわしい、「横浜能」に衣がえすることを決定いたしました。その内容はまだこれから肉づけをする必要もあり、具体的に発表するのは第五十回が成功し終了してからに致しますが、輝かしい歴史と伝統の上に立つ横浜能楽連盟としては、「横浜能」が永遠に継続され、それが市民にとって意義のある催しになることを念願し、リフレッシュするものであります。

そこで明年の第五十回記念能でありますが、九月二十一日から三日間、初日は梅若六郎師の「安宅」、二日目観世清和宗家の「望月」古式、三日目宝生英照家元の「道成寺」と大曲を揃え、金剛、金春、喜多各流の家元級が舞囃子で御出演頂くという、今日の最高の顔ぶれで行われることとなりますので御期待下さい。

平成十二年度の総括

能楽連盟の年間事業には、年度当初の総会、五月の五流能楽大会、九月の横浜能、二月の五流交流のつどいの他、会報「幽玄」の発行（年二回）などがあります。これら事業の円滑な推進のため、十二年度は理事会を八回開催しました。その概要を記して総括に代えます。

一、総会について

開催日時、場所、総会資料など主たる事項は、前年度末の理事会までに検討が終わり、会員あての総会案内の発送、収支決算書案、予算書案、四月一日現在の会員名簿の確定等の総会資料の調整。

二、横浜能について

家元級職分の演能による横浜能は遅くとも二年ほど前には開催日時を決め、出演のお願いをする必要があります。十二年度の横浜能については遺漏なく進められチケットも完売の好成績で、当初の目標を達成できました。

十三年度の開催日時、出演日の割り振り、出し物など決められました。

第五十回記念となる平成十四年度は、演能は九月二十一日梅若会、二十二日観世流、二十三日宝生流の三日興行とし、舞囃子は金春流、金剛流、喜多流がそれぞれ御出演いただくことが決められました。

五十回以降の「横浜能」のあり方について「の検討が始まりました。今年度前半期までには結論が得られるよう討議を重ねております。

三、能楽大会・

交流のつどいについて毎年その都度決めていた開催

日を、大会は六月、つどいは二月のそれぞれ第二土曜日と決めました。

出演時間が超過し、終演が予定より大幅に遅れる対策として計時による実態調査を行うとともに「超過出演料算出基準」を内規として決めました。十三年度第十七回大会に、観世流から素人能（企業会員・後藤ヨシ子氏）を出す提案がなされ、これに伴う出演時間配分負担金の変更、番組作成日程などを討議し、所要事項を決めました。

総務担当 鈴木 力雄
常務理事

追悼 浦部毅先生

理事 喜多流 馬場 洋一



新緑の五月十九日、浦部先生は天に召され、八十九年の人生を全うされました。久保山一休庵に安置された棺には船長の正装が載せられていました。友枝昭世師、流友、諸先輩、縁者の方々と出棺を待つひととき「シーブリーズ」と生前故人が口にしていた海からの風が窓外の梢

をそよがせていました。

私が浦部先生に初めてお会いしたのは昭和六十二年の暮れでした。それは同時に「お謡い」との出会いでもありました。

「洋謡会」を旗揚げし、友枝昭世師にご指導いただくまでの間、全く素人の私たちを根気よく、且つ力強く導いて下さいました。我々は先生の数多い知己の中で、最後尾あたりにおりましたが、「出来は悪いがかわいい弟子」であったと信じています。その弟子達は素直なものですから「強吟が和吟のような」浦部流を正しく継承しており、友枝師には「千秋楽」にちょっと変なクセがついている」と言われます。

先生は、終戦直前に「せりあ丸」の若き船長として軍部に楯突きながら、貴重な石油を無事に日本に運んだという戦史に残る活躍をされたそうです。「軍刀を床に刺されたときは、さすがの俺も〇〇が縮上がったよ」と笑って話される先生のお姿は豪快で責任感の強い船長を彷彿とさせるお稽古の後のひとときでした。

戦後、運輸省、海員組合、横浜市港湾局と活躍され、その間に囲碁、ゴルフの腕を磨き、その後、友枝昭世師の知遇を得て

「アー・ウー」の通じない世界に苦勞の歎び」を知られたそうです。宮越先生から託された

「海謡会」の維持発展に心を砕き、横浜能楽連盟において喜多流代表として活躍されました。

立派な経歴をお持ちの浦部先生も私たちにとっては、淋しがり屋で、わがままで、何事にも一生懸命な、気持は我々よりも若い、良きオヤジでした。十数年というお付き合いの中で知り得た先生は、豪快にしてある面では強引、責任感が強く、人の輪を重んじ、人間同士の付き合いにはとても繊細な心遣いをされるけれども相手にそれを感じさせまいとする方でした。私の父よりも年が離れた人生の大先輩に惹かれ、今まで「お謡い」を続けてくることができました。

今も浦部先生は私の心の中で生きていらっしゃいます。お稽古場の海洋会館会議室のドアを開けて入ってこられるのではないかとお稽古の度に思います。

浦部先生、様々なご指導をいただき本当にありがとうございます。ただき本当にありがとうございます。天上からいつまでも私たちを見守っていて下さい。私たちの「千秋楽の」ちょっと変なクセ」はきっと永遠に直らないのだろうと思います。合掌。

三代で舞う「船弁慶」

観世流 後藤ヨシ子

昨年、横浜能楽連盟の第十七回横浜五流能楽大会に「能」というお話を頂戴致しましてから早くも一年。その間連盟の先生方には種々ご配慮、お気遣いを頂戴致し、お陰様で迎えた五月二十六日でございました。前夜は自宅での稽古を終え、やるべきことは全て終えているはずなのに、その緊張感には「杜若」を舞った初めての能の時と変わりがありませんでした。横浜能楽堂は会社のある高島町からも近く、まだ檜の香りも高い建設当時から度々訪れておりますお舞台でもあり、その由緒ある成り立ち



のお舞台で演じさせて頂けること、また国立能楽堂、観世能楽堂とは違い横浜という地元であることなどが緊張感となったことと存じます。

自らの気力、体力を考えて挑戦した「道成寺」、経営を受け継いだとき、還暦の節目にとそれぞれの舞台にその折々の自分を重ねて舞って参りましたが、この度の舞台は能の世界でも希と言われる三代が演ずるということになりました。私にとりましては勿論、見所からお舞台の上の家族を見守る主人にとりましてでも大きな充足感と喜びを伴うお舞台となりました。

思えばこの度の「船弁慶」で知盛を舞った息子元信を、自国の文化を十分理解した国際人として育てようという意図し、六歳から始めた能に私が魅せられて以来三十余年。社業の合間を縫うようにして泉先生にもご足労をお掛けしてお稽古を続けて参りました。

自宅でのお稽古の思いがけない効果は、幼い孫達が自然に能に親しんでくれたこととございました。平成十一年に四歳の「鶴亀」、

二歳の「老松」での兄妹初舞台は、私が重い演目ではございまして一調ということで、幼い二人のフォローが出来ましたが、今回は二人の母親である美砂子、自らの舞雛子の稽古は二の次というほど行き届いた目配りを姑の私、夫である元信、二人



の子供達に見せ、家族全員の力を結集して舞台を創り上げたという想いが致します。

義経を演じた孫の元康は今年六歳。面を通して向き合ったとき、込み上げてくる思いに涙を堪えられなかったのは、単に幼い日の息子に重ねた孫の健気さでなく、乗り越えてきた諸々が形をとり、図らずも集大成された一つの舞台の上に実を結んだ

ことを、この身に肌で感じたからでございました。横浜で事業を興した先々代から七十七年。私が先代から引き継ぎまして十三年、能で培った積み重ねの基本を経営哲学として生かして参りました私にとりましては、趣味と申しますにはあまりにも大きな「能」の存在でございます。無事に舞台を勤めました今、私共三代が演ずる場を調べて戴きました横浜能楽連盟の皆様に深くお礼を申し上げると共に、見守ってくれました夫は元より支えて頂いた先生方、ご理解を戴いた仕事関係の方々に心からの感謝を捧げ、今後とも弛みない精進を改めて重ねて参るつもりでございます。

藤野善輔翁について

観世流 海謡会 江波戸菊代

藤野善輔翁とその周辺の事を、当時五歳だった私の記憶を元に書いてみる事にしました。

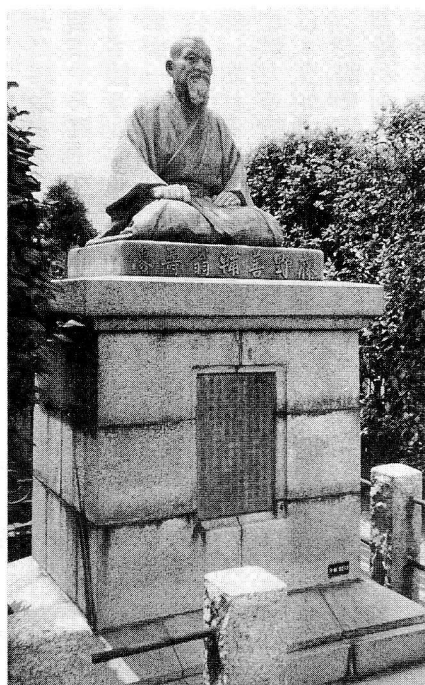
その頃、藤野翁を「藤野のおぢいさん」と呼んでおられた能や謡の同好の方は少なくなかったように思います。

お住居は、通称急坂と呼ばれていた日の出町一丁目から二丁目にかけての、野毛山に続く山の裾に近い所にありました。その急坂を下りきった所がT字路

になり、五、六メートル位の巾の道が左右にわかれており、我が家はそのT字路を右へ七、八軒先の所にあったのでした。

ある時、私は「これを藤野のおぢいさんの所にお届けして頂戴。行けばわかるようになっていくから」と、母に言われて家を出たものの、立派な大門もその小さなくぐり戸もいつも閉まっていたので、私は何となくおっかなびっくりの感じで行くと、おぢいさんは御門の外で待つて

いたようでした。



藤野善輔翁謡姿
この像の後が藤野家の
御墓所になっています。

おられ、物静かなやさしい方だと思っただけでした。

さて私の両親は、父須藤求(医師)母はアサと申しました。父は、震災前は当時梅若万三郎師の内弟子として度々御来浜のお伴をしておられた、青木只一

先生についてお稽古をはじめ、その後太鼓も習い御同好の方々と親しくなり、大いに楽しんで

大正十二年九月一日に、突然起こった関東大震災は、折角よい場所によい能楽堂を得て横浜の多くの人々が、名人上手と言われる方々のお能や狂言を拝見したり、各流派の素人の愛好者の方々に発表や交友の場となつて益々上昇の気運にあったものを、一瞬にして壊滅してしまつたのです。そして大変残念なことに、その能楽堂建設に大層お

路に面して、謡う御姿がおかれであります。実は須藤家の墓所も近くにあり先祖の墓参のためには、その通路を通りますので私は「おぢいさま今日は」という感じで銅像に軽く会釈申し上げて通っております。そして時々、その除幕式の場に両親と共におりましたことを思い出します。

『ちょっとしたざわめきと共に周囲にいる人達が静かになると、藤野家のお姉様らしい方が何か紐のようなものを引っぱつたのです。すると、そこに張り巡らしてあった紅白の幕がはらりと落ちて「おぢいさん」の銅像が現れました。私はびっくりして戸惑のような気持ちになり「おぢいさん」があんなになっただけど声は聞こえてこない…。

でももしかして、曲馬団の手品みたいに本当の「おぢいさん」は出て来るのかも知れない…。両親や居合わせた人々も、又ざわめき出して明るく話合っているのを見て不思議に思いながらもほっとしたのでした。』

そのお姉様は小学校の高学年ぐらいで、てきぱきした素敵な方でした。そして「アキコさん」というお名前だったのでしょ

除幕のとき「アキちゃん」と呼ぶ声が聞こえたように思います。後に私が女学生になった頃、両親が時々「藤野のおあきさん」といって話をしていたことがありました。又その方の御結婚の披露宴に両親はお招きにあずかったと記憶しております。

明子御姉様も既に御他界になられましたそうで、もう何年か早ければお目にかかれたかも知れないと、残念に思いました。現在、藤野家の御墓をお守りになつていらっしゃる方は、藤野敏子様とおっしゃる方で、大磯にお住まいでいらっしゃいます。

平成十二年九月一日

(十一時三十分)

藤野善輔翁を始め犠牲になられた方々の御冥福を心からお祈り申し上げます。

お能とわたくし

観世流 大林 光子
梅若会

(お能との出会い)

昭和二十一年の早春、戦災で消失した女学校の仮校舎だった遊行寺の本堂で演じられた金春流の「羽衣」がお能との初めての出会いでした。十四歳の私にはストーリー以外何もわからないまま、ただお能に圧倒されたような感動を覚えたのでした。

戦時中は農家の勤労奉仕や軍需工場への動員などの日々でしたのが終戦によってそれから開放されたばかりの女学生であった私にとって戦後の混沌とした世相の中でこのように美しい古典芸術に接することのできた喜びと幸せは深く心に滲みる思いでした。それ以来お能へのあこがれの気持ちをもち続けて四十余年平成五年になって漸く還暦の手習いとなったのです。

平成五年七月から平成七年六月までの久良岐能舞台での初心者教室の謡曲と仕舞でした。望みがなかった喜びから何も知らずうきうきした気分の生徒になったのですが、「観る」と「する」では大変な違いで、声を出すのも体を動かすのもひと筋縄ではいかず、四苦八苦でしたが楽しい二年間でした。その後当時ご指導いただいた高橋則子先生にお願ひしてお稽古をさせていだいておりますが「卵」のままで一向に「ひよこ」になることが出来ない現状です。

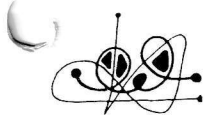
(不思議なお能の魅力)

稽古を初めてから日も浅いので沢山観ていないのですが、観る都度何とも言えないような優雅で心豊かな気持ちに誘われるのです。鏡板だけの簡素な四角い舞台空間からいろいろな場面をかもし出す不思議に心をうた

れます。かつて金春先生が謡は美しい日本語とお書きになっていらっしやいましたが、優雅で美しい(時には恐ろしい言葉も)言葉の積である謡曲。能舞台に響く謡う声の美しさに夢心地に誘いこむのは何故でしょう。また所作によって変わる面は私たちの心に喜びや悲しみを語りかけてくれる不思議。そして舞、先生方の舞い姿の美しさにただただ感動するばかりです。更に装束やお囃子など渾然一体となつて観る人の心を打つのです。お能一番観終わりますと、軽い疲労感と充実感と優雅な気分に分かれ知れるのです。何と不思議な魅力を持った古典芸術なのでしょう。

(能を学ぶ喜び)

最近ユネスコの無形文化遺産に指定された能楽に少しでもかかわることのできる幸せを心にかみしめております。覚えも体の動きも悪い私ですが、許される限り長く続けられるように日々の稽古を「一期一会」の気持ちで大切にするように心がけています。またこの喜びを生涯大切にしたいと思っています。



染井舞台にからまる話

観世流 小池 友三
興謡会

終戦後早々、ルソンから復員してきた私が染井の楽屋を訪ねていったというのです。不思議に未だにそのことが私には思い出されてこないのです。むしろ梅若厩橋の舞台で壮行素謡会をさせて頂いたこと、その又後日楽屋で実先生(当時は六郎名)以下梅若一門の方々に日の丸の旗に書いて貰った時の記憶の方は今でもまざまざと思い出せます。

この 染井の楽屋の話と反対に、私が佐倉の聯隊に初年兵で入隊していた時、梅若恭行先生(当時安弘名)が面会に来てくれました。これははっきり憶えているのが今度は先生の方が記憶なしです。もう古いことで夫々お互いに忘却の彼方になっています。

当時、東京住まいの私も横浜に越してきて、もう四十年近くになります。いつかは横浜に能舞台が復活することは宿命的だったかもしれません。

私個人にとっては染井舞台にからまってこんな忘れたことが想い出されます。ボヤッとした話ですが我ながら老いを思います。それでもやはり未だ謡っていることが好きなのでしょうね。

能楽堂だより

九月、十一月の公演

横浜能楽堂では以下の通り公演を開催致します。

「第十一回特別公演」

九月二十四日(月・祝) 午後二時。能「綾鼓」(喜多流) 粟谷菊生、狂言「無布施経」(大蔵流) 茂山千作。正面五千二百円、脇正面四千円、中正面・二階三千三百円。チケットはお問い合せ下さい。

「第二十一回定期公演」

十月二十七日(土) 午後二時。能「兼平」(観世流) 北浪昭雄、狂言「宝の槌」(大蔵流) 茂山千五郎。正面四千円、脇正面三千三百円、中正面・二階二千八百円。チケットは九月二十二日(土) 窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

「第三十三回普及公演」

「ブランチ能」

十一月二十二日(木) 午前十一時三十分。能「小袖曾我」(金春流) 櫻間眞理、狂言「因幡堂」(和泉流) 野村萬斎。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。未就学児童の一時保育あり。チケットは十月十四日(日) 窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分

分。お問い合わせ・お申し込みは二六三・三〇五五まで。

編集後記

▽この夏の暑さは、異常続きで真夏日や熱帯夜が多く、これまでの最高気温記録を塗り変えるなど厳しいものでした。

この暑さに体調をくずされ、熱中症にかかられた方が多かったと聞いています。

▽去る五月、横浜能楽連盟・顧問・浦部毅さんが逝去されました。連盟の理事会には杖をつきながら皆勤されたお元気なお姿が昨日のように想い出されます。

おそばに居られた馬場さんに追悼の記をいただきました。

▽各流のご協力をいただき原稿は予定どおり集まりました。

これからもよろしく願ひいたします。(M・S記)

横浜能楽連盟 連絡先

●文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜港南区丸山台二丁目
二九一七 新堀方

FAX 〇四五―八四四―一九〇三

●電話の場合

横浜能楽堂 原田由布子

TEL 〇四五―二六三―三〇五〇